



れの日まで
ハチカン往復書簡

曾野綾子 尻枝正行

講談社

著者略歴

●曾野綾子（その・あやこ）

1931年東京生まれ。作家。著書に、『遠来の客』『無名碑』『奇蹟』『神の汚れた手』『僕は猫よ』など多数ある。

●尻枝正行（しりえだ・まさゆき）

1932年鹿児島生まれ。現在、パチカン市国際諸宗教事務局次長。

別れの日まで

定価 1200 円

昭和58年2月20日 第1刷発行



著 者 曾野綾子，尻枝正行

発行者 加藤 勝 久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111（大代表）

振替 東京 8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

© A. Sono + M. Shirieda 1983

Printed in Japan

ISBN4-06-200362-7(0)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。（学1）

まえがき

尻枝正行神父とお会いしたのは、一九七二年のローマであった。厳密にはその前に、東京のローマ法王庁大使館でお会いしていたのだが、私は当時から、一度お目にかかった方のお顔をはっきりと心に灼きつけるほどの視力はなかった。

その頃、私は京都で「心のともしび運動」というカトリックのマスコミをやっておられるＪ・ハヤット神父や夫の三浦朱門とヴァチカンへ行く機会が何度かあったのだが、駐バチカン市国特命全權大使、菅沼潔氏ご夫妻のローマの美しい公邸にご招待頂いたことが、尻枝神父を深く知るきっかけになった。

今でもよく思い出すのだが、その日我々はお昼食を頂いたあと、何と日暮まで、公邸を辞去しなかったのである。適当な時を見はからっておいとまするのが礼儀だということを、私たちは皆知っていたのだが、そのような常識を忘れるほどに、私たちは、さまざまな魂の問題を語り合つて時を忘れてしまったのであった。

その日以来、尻枝神父は、私の師のお一人になった。私はそのような方々を「師団」と呼んでいる。軍隊の「師団」とは違うが、私の「師団」の方がはるかに強力である。

尻枝神父は、キリスト教だけでなく、仏教やイスラム教にも、深い知識を持っておられる。し

かしそれだけではない。何より尻枝神父はものごとの関係を明確にして下さる方であった。それは暗闇で、灯をさし出される感覚に似ていた。その灯は、しかも信仰の灯であった。そのために無理がなく、自然であった。神父にお会いしている間に、私の心に灼きつけられたものの中から、私がどれほど創作欲をかきたてられたか知れないところを見ると、創作のエネルギーは人間とその関係が発見されて行く過程にあるということもまちがいなさそうである。

私は次第に、その灯を一人占めにはいけない、と思うようになった。本当は神父お一人に書いて頂きたかったのだが、尻枝神父もマスコミに対しては謙遜を通り越して臆病なくらい控え目な方であった。

それなら仕方がない。私がまず身辺雑記的なことを書き、神父がそれを受けて下さる「往復書簡」という形にしよう、ということになったのは、私が白内障のために視力を失って、五本の連載を休載にしなければならなくなってから後のことであった。

手紙の第一回は、私の眼の手術が決った直後になっている。正直言ってそれ以前は、計画はあっても私にその氣力がなかった、ということであろう。生まれつきの強度近視の眼の白内障手術が、どれほど多くの危険と、やや絶望的な術後の結果を生みやすい因子を持っているか、ということなど知る由もなく、のんきに手術ができるようになった喜びを伝えることから、この手紙は始まっている。

私はその時、自分が視力を全く失うとは思っていなかったと思うが、万が一、経過が悪く時には、この「往復書簡」が自分の心を立てなおすための綱の役目をしてくれるだろう、とは莫然と考えていたように思う。

連載を総て休載するほどの視力で、最初の一回の手紙がどうして書けたかというところ、これは資料が一切いらなかったからである。その頃、私は眼を紙面から五センチぐらいに近づけて、一分くらい活字を読むことはでき、原稿用紙に大体あてずっぽうで大きな字を書いておき、後で秘書に清書をしてもらうことは、読むことに比べればその楽さの点で雲泥の相違があった。自分の原稿を読みなおすことはやはり苦しかったが、連載が現実を開始されるまでの間に、私は視力をとり戻したので、もし視力が出なかったら、この書簡がどうなったかということに関しては何とも言えない。眼が見えなくなっていたら、私の手紙の部分は恐らくもっと重厚になっていたろう、ということだけは言えるかも知れない。

私の手紙の、初めのところが、朝日新聞社発行の『贈られた眼の記録』と多少重なる要素を持つことは、そのような理由でお許し頂きたいと思う。時間的には、私はこの手紙の方をずっと先に書き始めており、往復書簡の性質上、勝手に整理することもできなかったのである。

ローマ東京間の、手紙の往復には、覚悟の上とは言え、やはり多少の困難があった。「すれ違い」が生じた原因の総ては、私が手術後の心理的な混乱と不手際のために「メ切り」に遅れたか

らである。駐日ローマ法王庁大使、マリオ・ピオ・ガスパリ大司教は、この手紙の往復に、常にあたたかい援助の手をさしのべて下さった。大使のお心づかいがなかったら、この本はこれほど円滑に完成にまでもちこめなかったと思う。

私の視力も心理状態も最低の状態にあった一九八一年二月末、尻枝神父はローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の訪日随員として日本に帰られた。

神父は常に教皇のお傍の席におられ、私は視力を補うために双眼鏡を首にぶら下げた恰好で記者席にいた。その私のために、要所要所で必要な資料を渡し、手短かにポイントを解説するため記者席の私を招いて下さった神父のお心づかいは、あの風花も舞った広島、氷点下二度の雪の長崎の風景の中で、木洩れ陽のようなあたたかさとして、私の心に残っている。

曾野綾子

目次

まえがき

曾野綾子

I

すべてを失ったとき神を見る

II

目が悪くなって一年三ヵ月が……

曾野綾子

II

曾野さんの目を案じつつ……

尻枝正行

24

苦しみが私を救う

39

二回目の手術は大成功です！

曾野綾子

39

「奇蹟」の視力回復に感動

尻枝正行

50

人生が私から何を期待できるか

61

総て、生命も借りものなのですね

曾野綾子

61

何故、神父になったかという

尻枝正行

71

幸いなるかな、待つ人

母の一生をふり返ってみると

尻枝正行

85

神父さまの母上のように死ねたら

曾野綾子

94

後退りしながら未来に入っていく

差別語と戦争中の言論統制

曾野綾子

105

特攻隊にものあわれを

尻枝正行

115

絶望からの出発

一・五の眼鏡を頂いてから

曾野綾子

127

この世の「チント見」ほどほどに

尻枝正行

136

一粒のねがいを持ちつづける魂

お目にかかれると思うと……

尻枝正行

149

ローマでお別れしたばかりで

曾野綾子

160

149

127

105

85

神の愚かさは人間の賢さに優る

171

園芸を楽しむ、ハリが上手に……

曾野綾子

172

翳りのあるローマをご覧いただいて

尻枝正行

180

ひとすじの気持で咲く

195

今度は神父さまの視力が心配で

曾野綾子

195

すれ違ってばかりいるのが現代だ

尻枝正行

205

神は人を拾う

219

一つの月が幾つにも見えるのです

尻枝正行

219

ぜひ眼の検査と人間ドックを

曾野綾子

231

聖書は人間の罪の物語

245

バチカンについて書いてみます

尻枝正行

245

インドネシアから帰って徳島へ

曾野綾子

259

死は未完成の完成

273

往復書簡もこれで終るかと思うと

尻枝正行

273

実はコンピューターを導入します

曾野綾子

285

葵嶺司 修

(表紙リチマブエ画)

別れの日まで

——東京バチカン往復書簡

引用聖書は曾野綾子Ⅱフランススコ会訳、尻枝正行Ⅱ自由訳による

すべてを失ったとき神を見る

目が悪くなって一年三カ月が……

曾野綾子

尻枝神父さま

昨夜は嬉しくて眠れませんでした。嬉しくて眠れないなどと言うのは、小学校の時以来忘れていた感情ですが、名古屋保健衛生大学病院へ最後の検査を受けに行き馬嶋慶直先生からやっと、七夕さまの前後に私の目を手術してやろうとおっしゃって頂いたからです。もっとも、最後の一つのテスト（度の強い先天性近視の私の目の網膜がどの程度の能力を残しているかという検査）の結果はまだ出ていないので、それは百パーセントのOKではなくて、それほど喜んでいいことかどうかと自分の心に警告するものはありますが……。昔から私は大変気の小さいところがあって、何かと言えばすぐ悪い方へ悪い方へと解釈して、心理的な予行演習をするのですが、それは万が一

まく行かなかった場合、自分の心のみじめさを何とかして少しでも和らげたいという、予防策なのです。

昨年の三月、私は視力がひどく落ちたのを感じました。どんな晴れた日でもまぶしいということがなく、どんなに大きな電球をつけても物を見る時に暗くてしかたがありませんでした。私は年齢のせいなのだと思います、眼鏡を作りかえるために眼科のお医者さまのところに行つて、そこで、中心性網膜炎と眼底出血と、二つのやや厄介な病気があると言われたのです。中心性網膜炎というのは目玉の湿性肋膜炎のようなものと説明されました。ストレスの強い、心配事のある人がかかる病気だと言われて、私はちょっといい気分になったものです。私はふだんできるだけいやなことはサボり、責任はそれとなく人に押しつけ、楽をして生きているつもりでしたから、逆に苦勞している人のなる病気にかかったとは人聞きがいいやと思つたのです。しかしこの病気は繰り返すとその度に視力が落ちて行くし、私の場合、（あまり例がないことだそうですが）両眼に出たということで、私は仕事を中断せざるを得ないと思ひました。

低血圧の私は眼底出血などが起きたことになかなり不服でしたが、まあ、文句を言ってみても現実はそのうちのことらしいのです。こちらの方はすでに過去に起きた症状で、出血は癍痕はんこんのような状態で残っているだけで、今は何の処置法もないということでした。ある日突然出血が起き、目の前が急に暗くなったはずだと言われましたが、私にはそういう覚えもありませんでした。ただ

私はそれより数ヵ月前、朝日新聞の連載小説「神の汚れた手」の最後の数十回分を書き終える作業をし、七年間の取材の後にやっと完成を見た、高瀬川のダムと発電所を舞台にした「湖水誕生」を「中央公論」に連載し始め、その上三年目に入った「群像」の連載小説イエス伝「その人の名はヨシュア」も継続するという荷の重い仕事が重なって、ろくすっぽ見えない目を一日十数時間もコキ使うという愚行をやっていたのでした。

私は初め、この現実をかなり冷静に受けとめたつもりでした。生まれつきあまりよく見えたことがない目なのだから、今更じたばた慌て^{あわ}てる理由もないと思いました。私の視力の障害になっている三つ目の病気は、八年前に発見された白内障による三重視で、これも三十代に私が不眠症に悩んだ時、飲み過ぎた睡眠薬の影響もあるのではないかと、当初は言われたのです。物が三つに見えるということは、当然、頭痛と抱き合せになるのですが、朱門は「美男のテイシュが三人に見えていいじゃないか」とか「一万円札も三枚に見えるだろう」などと言うものですから、私も本当にそうだと思ってゲラゲラ笑っていたのです。

五本の連載を続けることは不可能になったので、私は二十六年間の作家生活の中で、生まれて初めて完全な休暇をもらいました。初め私は嬉しくて笑いがとまらない感じでしたが、やがて多少は事の本質を見たようです。病気が発見されてから二ヵ月後に私はひどいシヨックに陥りました。私には昔から閉所恐怖^{フオビ}という恐怖症^フがありましたが、視力がしだいに落ちて行くということ

は暗黒の世界に生きながら閉ざれることでした。私は今までに何度も取材のために工事中の隧道に入りましたが、その度に性懲りもなく息苦しさを感じました。コンクリートの巻き立ての完了した隧道が崩れることなど、常識では考えられない。それでもなお、私は隧道に閉じ込められた時の自分の狂乱ぶりを思い浮べると、保安帽の下に滲み出るあぶら汗を同行の人に気付かれないように、軍手の甲でそっと拭くこともありました。視力が弱まるということは、まさに閉ざれるという感覚だったのです。

五月の末、七十二時間ほど、私は半分狂気の世界に行きかけました。不眠症の最もひどかった時私は口を利かなくなることがあって、その時の体験は「椅子の中」という短篇に書いたのですが、その時以来の危機だったかも知れません。私の意識の中にはこの世の果てに一つの滝がありました。水量のあまり多くない、うす汚れた滝です。私は自分から望むでもなく、強制されるのでもなしに、いつの間にかその滝の向う側の世界に入ってしまったように感じました。

そこは感情の死に絶えた乾いた世界でした。若い時、私は精神病というものは肉体の痛みもないのだから楽な病気にちがいないと考えていましたが、今は恐らくそれほど苦しい病気はないだろうと考えています。喜びや、憎しみや、悲しみといった私たちの心を潤す感情はすべて認識として覚えているのですが、滝の向うの世界に行ってしまった私の感情はそれによって動くということがないのです。不動性、乾燥、固さといったものが、夜も昼もない月面のような感情の荒野